平成 19 年度海外研修派遣報告

大阪大学医学部附属病院放射線部　祐延良治

1. 期待していたこととその結果

私の専門分野は医療情報システムだが、この分野の将来の展開を医用画像の利用を中心に知りたいと強く願っての参加であった。特に現在の PACS は一般にプラットフォームが完成しつつある状態で、これをどの方向で発展させるべきなのかのヒントが得られると考えたからである。期待したのは、放射線画像の最先端がどのようなものか、広く知り、異種画像からの情報のミックスにより、どのような展開が考えられるかを見ることができるのではというものであった。結果は期待を十分に上回るものであった。前半の講義で Stanford Radiology で CT、MR、PET の最新情報を講義してもらった。それらを専門にしている日本からの参加者には、既に知っていることで物足りない部分もあったかもしれないが、全体像を知りたい私には「なぜこのような画像が必要なのか」という導入から始まり「今はここまで来ている」で終わる講義内容がマッチして非常に理解しやすかった。後半では現場を見せてもらった。画像処理センター「3D ラボ」や病院内の MR/CT/サイバーナイフを操作している現場の技師の方にいろいろな話をしていただき、時間がいくらあっても足りない状態だった。中には「こんな程度なのか」という声が聞こえる場面もあったが、研究ではなく仕事として日々の作業をこなす場では、いかに質の高い仕事を数多く臨床患者に還元できるかが最優先なのだから背景を知ることが最も重要になる。ワークフローと効率の関係を深く考える機会を与えてもらった。最終日の Gambhir 先生の分子イメージングの話は放射線以外にも光や音を出す化合物で病変部を細胞レベルで標識し，非常な早期に発見，治療してしまうという内容で「成功すれば現在の医療がいらなくなる」と話されていたとおりのインパクトを受けた。なぜ分子イメージングがこれほどまで注目されているのかを知らなかった自分を恥ずかしく思うとともに、コンピュータ技術や遺伝子操作技術の急速な発展に呼応して非常に近い将来「学ばなければならない必須科目」になることは間違いない．放射線技師はこれまで物理や工学を得意分野としていたが，生物や化学をもっと勉強しなければならない時代に突入したと言える．最後に全体をまとめるように Glazer 教授が講義してくださった．これまでは「形態」の追求で発展してきたが，これからは「生態」を志向した発展に向かうという内容でさまざまな具体例で示していただいた．その先見性には驚くばかりであった．

2. 放射線技師から見た日本と米国の違い

失礼かもしれないが，人間として見た場合は全く差がなく，がんばっている方は非常に仕事に熱心で我々に対しても大変親切であった. 制度的に日本とは異なるが常に最新の技術の習得を必須とするための免許制度や 2011 年の放射線技師免許取得者からはじまる免許更新制度などは内容的にも日本の技師の置かれている立場と同じように感じた．サラリーは日本より若干高いように聞こえたが保険など社会制度が違うので，給料から得られる価値は日本と変わらないのではないかと思った. このあたりを日本に代表の方を招いて講演してもらったら良いと思った.

3. もっとも印象に残ったこと(セミナーとイベント)

前述したが最終日の Gambhir 教授，Glazer 教授の話はハンマーで頭を殴られたような，これからまだまだ理解努力しなければならない広大な荒野と天国を見せてもらい, 強烈なやる気を引き起こさせていただいた．感謝しても仕切れません．また，何も知らない私に日本から参加したメンバーの方が最先端の内容を噛み砕いてわかりやすい形で教えていただきました．これも得難い宝物でした.

4. 今回の海外研修のあり方について

反省会でも述べたが，病院での見学があまりにも短かったため，できればまる 1 日取って欲しかった．しかし，そのために講義を削るようなことはして欲しくないです．全体のバランスは非常に良かったと思います．また，今回講義していただいた先生方，技師の方々に後日再度質問したいことがたくさんあるのですが，皆の質問を日本語で受け付け，英語に翻訳して先生方に回答していただき，再度日本語に翻訳して皆に公開するようなことはできないでしょうか．ぜひともお願いしたいところです.

5. お気に入りの写真

大学近くのレストランで食べたステーキ(約$50)は抜群の味でした．味と量にノックアウト．日本では絶対にこんなステーキは味わえません．身も心もパワーつきました!!